

白

坤



心
竹
筵
几



梁川



為五童送愛
賀の仙人表
榮時



文安詩歌合の十六番 仙家見菊

左 侍従重輔

一飲菊潭秋浸霞随流忽到竺仙家
風霜還恐芥柯爛不為着棋為見花

原作地仙更作竺仙

右 卷議雅永

山人の跡はむ卯に朽し芥の元はぬ色を
残す白菊

後成恩寺 判云 太政大臣 左右ともは極柯の好事を詠せりとりて廿字八句の拙き詞は侍りたる殊なる風情乃侍りぬる朽し芥の元なる色とつけられ侍り誠にいひききし仰りて之を信ずるに在りては名をや



竺仙素行翁の表壽の賀を祝して何事也書くこと乞われは是ハ二行
寫してたてまつる 西暦廿二年十月吉日 栢野屋士源



昔の里亭遊楽の
為の正行しし事
神、持て置けりし
物て多あはれ合の
と抄記してあるは

その間合はる事し
狂米舟なる百の
し其は更なる事
お認めしと今も
以ししは終るし



景年 龍彦
 二十九年 初冬



是の来ありし
 丁酉の 乙酉
 年也

横痴先生の祝詞を添えられし年の所文
 中ありかゝる老の涙とあはれずは舞
 おもひをききものとおぼしうし
 させてうらみ付けおし
 ちん仙

加藤氏令孫幼年

心はあは

七十七のからよ

そはあはちよ

はあはあはあ

あはあはあはあ

あはあはあはあ



九世三子



著世弥在
 之
 若久乃
 歡々南



石背



吴服高竺佛子精于染最巧造凉且
 多才且能多福多寿多男子皆可美矣
 竺字五福因以祝
 竺佛漆仰七十七度嘉辰
 庚子孟日 及人香走度



松山先生。

中世の

如きもの

久英

ふらふら → くらげの 門
水は海を流す くらげの 門

松山先生の手紙

~~~~~

久英

ちたあはかー ちまへん

ちたあはかー ちまへん

ちたあはかー ちまへん







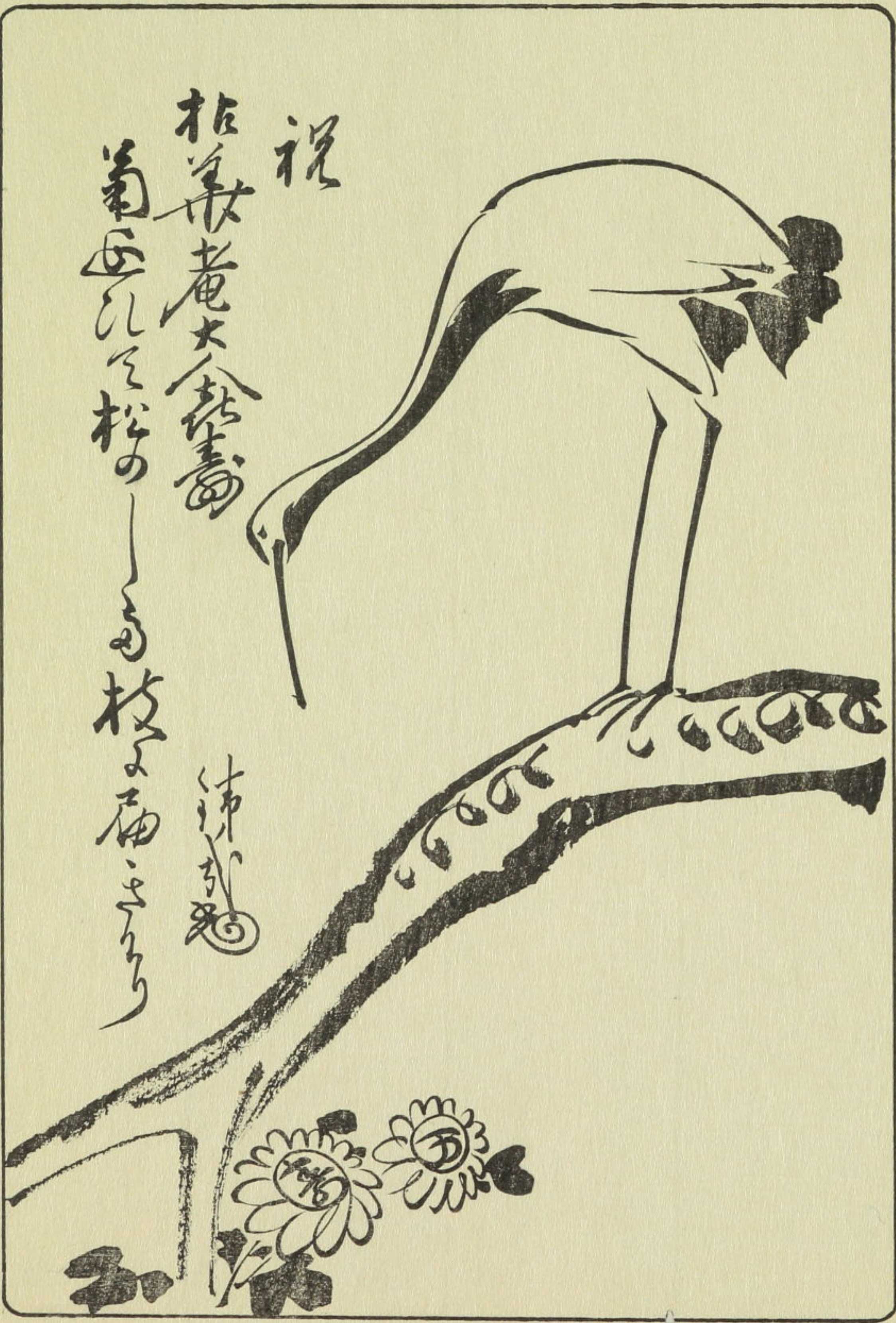
橋本素行の——七十七の賀延をうり  
 因といふ舟子をのり——これゆ一旬をか  
 ききよしとて翁や子孫振と老戸富  
 仕相れとこれよりあふ我千代乃春秋一富を  
 終ん

紫香

小——女

神——あま

年男



祝  
 枯葉老人の壽  
 菊の心は松の——

神——あま














中书梅后  


以  
 也  
 也  
 也  
 也

年  
 中  
 也

老  
 松  
 也

也  
 也  
 也

也  
 也  
 也

也  
 也  
 也

也  
 也  
 也

了  
 仲



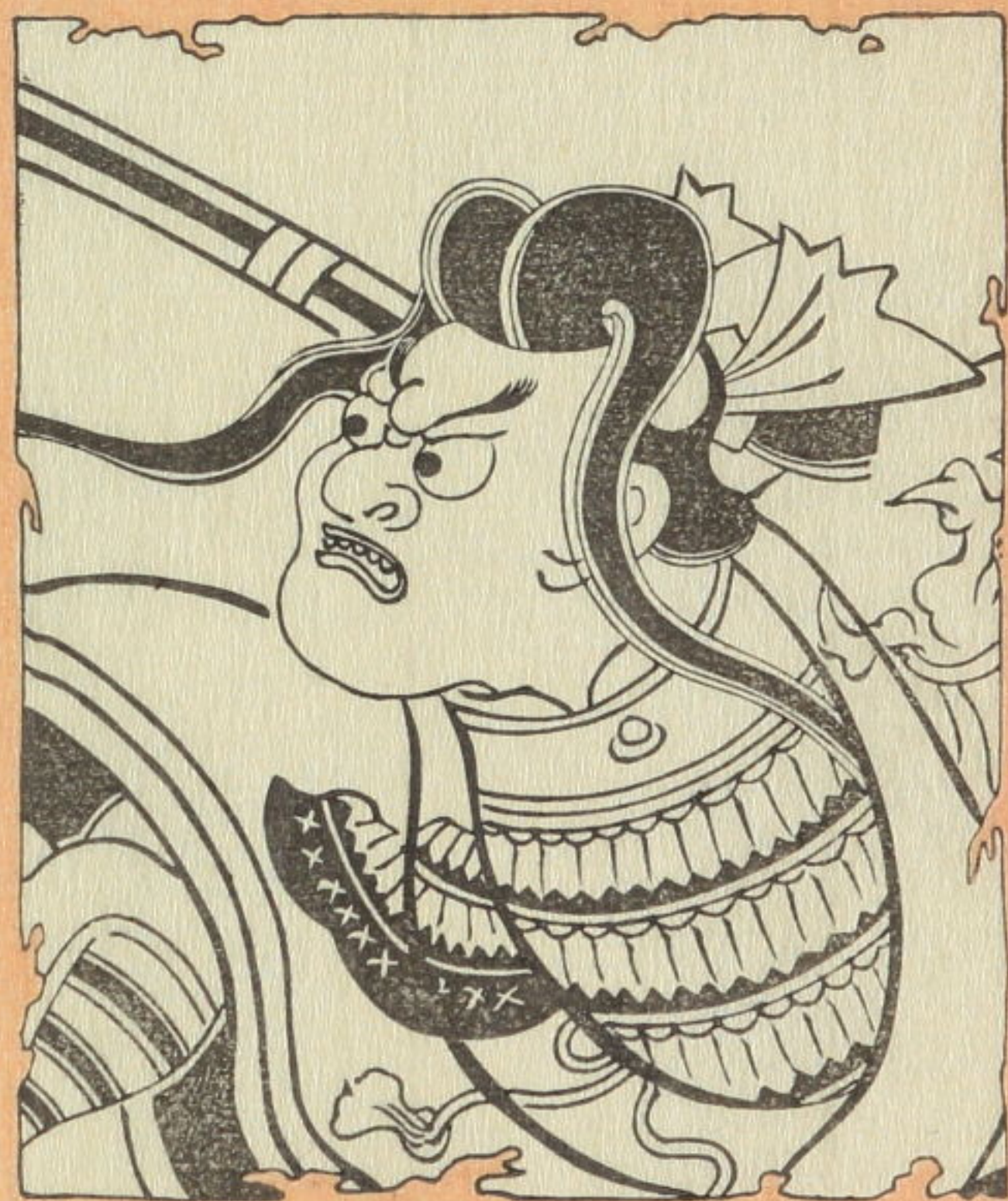




故鳥居初代清信之法

三世

清忠馬



笠冠者もあはれし

花の咲く是の松の葉

はみくら新のなまをよに

かゝく前文

菊のさく白き花の影

海山一ふ所細草のほこり

朝て来し板を遠自やまの峰

鳥居 梅枝

鳥居 羽所

鳥居 隆志

鳥居 梅年

小燈 梅百



あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ

素朴  
之花  
唐舟  
亦自  
松長

あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ

安山  
毛芭

あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ

永周  
之鏡  
何徳

あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろ

志文  
成之  
大山  
泉山



孫子と孫をあらはし菊のこ  
降つる力一こい程のを  
長心とてしけし者相神  
吳竹のこし系を如き  
何とてたよ名さきし一翁草

外山  
魚魚尾小  
宮原  
三層  
倉原

ふいふふふふふふふふふふふ  
ふいふふふふふふふふふふふ

藤原

しほやゆい系梅の蓋梅の角  
老の老や祝はしをさし菊のを  
きききふし小春のし女花  
下河のくしをさし小春のな  
な程のくしをさし小春のな  
秀方秀方のくしをさし小春のな  
小男子小男子のくしをさし小春のな

梅梅樹  
小櫻小櫻金  
唯唯紋  
直直高  
中中高  
武武部  
時時龍







花のよき花をよきし春は  
河をよきし物破るまの音

五色の  
山  
秀光

いとよき曲のほろり  
浪中よけくも世程  
ちよから花のよきし春は

三升  
梅香  
延外

舟のよき大舟のほろり

舟  
とらふ

梅のよき花のよきし春は

舟  
とらふ

花のよき花をよきし春は  
梅のよき花をよきし春は  
舟のよき大舟のほろり  
梅のよき花のよきし春は  
舟のよき大舟のほろり  
梅のよき花のよきし春は  
舟のよき大舟のほろり

木玉  
花片  
古殿  
梅堂  
新雨  
草文



手少くも書きて置く花の世を 大坂 長久

好りて初高き色さるる花 京 柳城

雨の月面望の建つ海ら 休井 幽谷

吹通す時竹の羽根や新の糸 徳川 若儀

小豆粥下したる何より 田中 豊我

くはくはちを 素井 藍花

仲子木の鈴はけや花のちも 武 菊と

平九まじりぬち物秋の松、 康高

雲とあつたおちりぬ 糸 竹の春 掃乞

乳の糸 古 草すま 玉成 向は小懸

初 平 一列 松鳩

か 孝高

は 揚名



けりとも君も也小神菊傳し  
 舞のち可く深しき所は葉のふ  
 七針のふさぎまよ峰をこも  
 崎や若くまゆ月移音河  
 たる流をせとちのこ何く危  
 月海を空のみにけし小夜原  
 よらこしめ師をうごめ葉の海  
 七情を所く神をさるるの理  
 性春  
 吐雪  
 松煙  
 恋雅  
 年申  
 吾山  
 金桃  
 於女

不やなむし男女菊小神  
 子也節やれをけしみの花を子  
 ちも碧の松や縁は男山  
 所をえす衣のまを老の性也  
 新語や花の字つなまを好い際  
 可飛を  
 破十  
 二筆  
 菟好  
 於一

春の乳し能へまぬ己衣を秋  
 春ぬぬやうし川も一またた  
 梅甫  
 可笑







河原五郎申す八日熱海入浴せし流車より

稲妻やしらけし熱海の水

おれし中目黒申すらりの日光よみ宿

御廟を拜して

いそいでしこしの櫻一おまのまじ

花のしらけしおのけい

いそいでしこしの櫻一おまのまじ

明後日寅申流車よみ小川おまのまじ

あふれしおのけいおのけいおのけい

通りの流車よみおのけいおのけい

あふれしおのけいおのけい

河原五郎申すらりの

あふれしおのけいおのけい

寺の美女は世に言ふ川流の流車よみ

竹二節を流しおのけいおのけい

あふれしおのけい



春の安否鼻すまめを老の僻

平の御外宮

まのり果てしなく松林

平の御外宮

あらたしと思われぬおなまら

二見はのり御外宮の御外宮

表をておのりし二見御

卯月九の雨津の御外宮の御外宮

老山

時雨の御外宮の御外宮

おのりおのりおのり

姫山御外宮

雨の御外宮の御外宮

信長公の墓の御外宮

おのりおのりおのり

御所



西平河津花猪は量りぬ  
此堂の瓦中一掃文はしるべきなり  
物も取付しるべきなり

山内社談

いふ事いふ事いふ事  
平野社に二階あり

初めは山内郡の東を

全園寺

堂と外をいふ生を  
所の所お見

その外は山内郡の東を  
初めは山内郡の東を

山内郡をいふ

物も取付しるべきなり

清水をいふ

山内郡の東を

山内郡をいふ

山内郡の東を



くさくさのうらみはまぬのうらみ

くさくさのうらみはまぬのうらみ

清水親也書

くさくさのうらみはまぬのうらみ

東大寺

くさくさのうらみはまぬのうらみ

丸山長楽書

くさくさのうらみはまぬのうらみ

祇園社

丹波のうらみはまぬのうらみ

智恩院

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ

丹波のうらみはまぬのうらみ



河津の舟

舟の舟  
舟の舟  
舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟の舟

舟



色づきし柳舟のあらしら

初瀬舟のし雨

あつし〜川邊の深き水

あつし〜白堂

ねむる〜し〜りあふ

春日神社

柳の葉のま〜り〜りあふ

あつし〜白堂

行舟の〜新葉の白ら〜りあふ

あつし〜白堂  
〜の月のま〜り〜りあふ

大坂市の春の風は〜りあふ  
あつし〜白堂

あつし〜白堂

あつし〜白堂  
あつし〜白堂  
あつし〜白堂  
あつし〜白堂







二の巻に浮のうねりからたつた

夏草のやうな草の層の岩

程丹浮

群一也鼻のまじりた

大園を序

切草のまじりた

うらたのうねりからたつた

言はくた

群一のうねりからたつた

川中を序

一このうねりからたつた

善光寺

生の善光寺のうねりからたつた

かたがはのうねりからたつた

白屋のうねりからたつた

かたがはのうねりからたつた







自賀

一歩の歩むは花のまじり草花 竺仙  
 一歩の歩むは花のまじり草花 竺仙  
 果も葉も花もまじり草花 竺仙  
 のまじり草花のまじり草花 竺仙  
 草花のまじり草花のまじり草花 竺仙  
 まじり草花のまじり草花のまじり草花 竺仙

ウ

静まを河一歩のまじり草花 竺仙  
 遍塞上後と陽の陽わし 竺仙  
 一歩の歩むは花のまじり草花 竺仙  
 何れ役者様まじり草花 竺仙  
 大徳の徳ありし頃の徳ありし 竺仙  
 聖の徳ありし頃の徳ありし 竺仙  
 世の徳ありし頃の徳ありし 竺仙  
 永年の徳ありし頃の徳ありし 竺仙







ナウ

宗旦のりよをなぶる才あり

世評しつゝ丁嶺り解

荒津のたぐう人いふまじく

杉の並木りまのあけり

乃却を隠しつゝ花いふまじし

春の舟りりしとすゝ丸

お

とこらむいふまじくは起つゝの鏡

於

仙

於

仙

於

仙

坐仙あゝの歌中せよあゝ世喜の傳り  
 以詠をまゝとあゝ舟子た恩を  
 因りて志をまゝとあゝ子孫を  
 よめよのつねをまゝとあゝ我はま  
 祖文の因りてまゝとあゝ心  
 誰の因りてまゝとあゝ心

芥目  
 梅幸









何れも之を以て  
 筆の師とす 男 深花  
 菊の穂しを竹の子堀後 檄 男  
 狸下新出の山に 素心  
 昭和二十一年  
 十月二十日發行

明治三十二年十二月五日出版  
 同 三十三年五月十日發行



著述者 橋本素行

淺草區北富坂町拾九番地

出版者 橋本仙之助

同區北富坂町拾九番地

印刷者 橋本英次郎

同區湊賀町拾九番地

發行所 松崎半造



